

天理教災害救援ひのきしん隊

明治24(1891)年10月28日、濃尾大地震が発生した。この地震の規模はマグニチュード8.0であり、日本で当時観測された最大規模の地震であった。天理教の災害救援活動はこの震災を契機に始まった。その後も、災害救援活動は、関東大震災や阪神・淡路大震災をはじめ、毎年のように日本各地で起こる災害に対して、今日まで途切れることなく続けられている。

さらに、昭和46(1971)年には、天理教災害救援ひのきしん隊(災救隊)が発足し、全国の各教区(都道府県)に教区隊が結成された。今年2021年は、災救隊の発足から50年という節目を迎えている。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、災救隊は地震発生直後に被災地へ赴いている。本部長(当時)を務めた田中勇一氏は、災害救援の前線に立った責任者である。田中氏は、天理教における「ひのきしん」とボランティアの違いを、天理教の教えに照らして次のように述べている。

ボランティアはひと言で申せば、人間の行為としては最高の善意の行為であります。ですが、人の善意というのを受ければ、人は普通「ありがとう」と答えるものです。仮にこの「ありがとう」という返事がなかったら、少し喜ばなかったりするのかも知れません。片やひのきしんは、日ごろのいただくご守護に対する感謝の気持ち、親神様へのお礼の態度ですから、ひのきしんをして、お礼を言われればお礼にならないので、できるだけお礼を言われないようにする。むしろ、こちらからひのきしんをさせていただいたことを相手にお礼を言⁽¹⁾って帰ってくる。言葉の使い方もはっきり言って全く違う。

ひのきしんとは、日々、親神に生かされて生きていることへの感謝を自らの行動や態度で表現することである。すなわち、日常の“生き方”や行動に関わっている。確かに、他者から見れば、ひのきしんもボランティアも見かけは同じであるが、「させていただく」という「親神様へのお礼」というひのきしんの態度は、ボランティアと明らかに異なる。

イスラームにおける自発的喜捨

信仰上の義務的喜捨(ザカート)に対して、自発的な喜捨は「サダカ」(sadaqah)と呼ばれる。「ザカート」と「サダカ」の語は、いずれもクルアーンに登場している。義務的喜捨(ザカート)は、礼拝の語とともに用いられる点で、ムスリムとしての信仰的義務の文脈で論じられる。それに対して、自発的喜捨(サダカ)は、「自発的喜捨」(sadaqat al-tatawwu')や「義務以上の喜捨」(sadaqat al-nafl)として論じられるように、通常以上の他者への布施や施しを指す。

神は、利息(への恩恵)を消滅し、自発的喜捨(sadaqāt)には(恩恵を)増加してくださる。神は忘恩な罪深い不信仰者を愛されない。(Q2:276)

クルアーンでは利息を得ることが禁止されているが、これは他者から不当に暴利を貪ることを禁止していることを意味する。したがって、イスラームにおける金融現場では利息ではなく、手数料として処理するなどの対策が取られる。それに対して、自ら進んで他者への献身を行う者に対して、神は恩恵を与



2011年4月13～14日、東日本大震災で被災者支援にあたる日本トルコ文化協会のムスリムたち
(<http://www.nittokai.org/report/detail6.html>)

える。この恩恵の延長線上には、来世において楽園(天国)へ行くことができるという考え方がある。

「そうしないではいられない」—ムスリムの震災支援

東日本大震災は、15,000人を超える死者を出す未曾有の大災害となった。一般のボランティアのほかに宗教者も被災地へ多く駆けつけ、被災者に寄り添った。それとともに、宗教団体は連携しながら被災者支援にあたってきた。被災地へ駆けつけた宗教者のなかには、もちろんムスリムの姿もあった。

『現代宗教2015』では、被災者への炊き出しを行ったムスリムNGOの一つ、ジャパン・イスラミック・トラスト(JIT)で活動するムスリムたちへのインタビューを掲載している。ここでは、被災地へ赴いたムスリムたちの被災者支援への心情が採録されている。

すでに述べたように、ムスリムの自発的喜捨は神からの恩恵を導く。しかし、ムスリムたちは神からの褒美を求めて被災地へ向かったわけではなかった。ある日本人ムスリムは、インタビューのなかで次のように述べている。

私の場合は日本人ですから、アッラーがそういう風にやると褒美をくれるということよりも自分の気持ちがおさまるから。そうしないではいられない。情けないかな、アッラーのことまで気がつかないでいるっていうのが本音です⁽²⁾ね。

震災ボランティアに際して、この日本人ムスリムは、自発的喜捨を通して神の褒美を求めて活動したわけではなかった。一人の人間として、少しでも被災者の役に立ちたいという考えであった。

「させていただく」と、「そうしないではいられない」という2つの言葉のなかには、宗教の違いを超えて、人のたすかりを願う信仰者としての生き方が現れている。

[註]

- (1) 田中勇一「天理教災害救援ひのきしん隊の活動」天理大学おやさと研究所編『東日本における天理教の救援』、天理大学おやさと研究所、2012年、77頁。
- (2) 「ムスリムはなぜ東北に向かったのか」『現代宗教2015』国際宗教研究所、2015年、233頁。

[参考文献]

- 金子昭『駆けつける信仰者たち—天理教災害救援の百年』、天理教道友社、2002年。
- Makoto Sawai, "Salvation Through Saving Others: Toward a Tenrikyo-Muslim Comparative Theology for Japan Today," *International Journal of Asian Christianity* 3-2, 2020, pp. 211-223.